

火山噴火と原発

9月27日の御嶽山噴火は、いまだ行方不明者の捜索が続くが、戦後最悪の犠牲者を記録した。水蒸気による「小噴火」といわれるが、突然の火山噴火の怖さを見せつけた。火山噴火というと、1991年6月3日の雲仙普賢岳の大噴火を思い起こす。今は亡き父と、春日井市民病院の待合室のテレビで一緒に見たことを鮮明に覚えている。

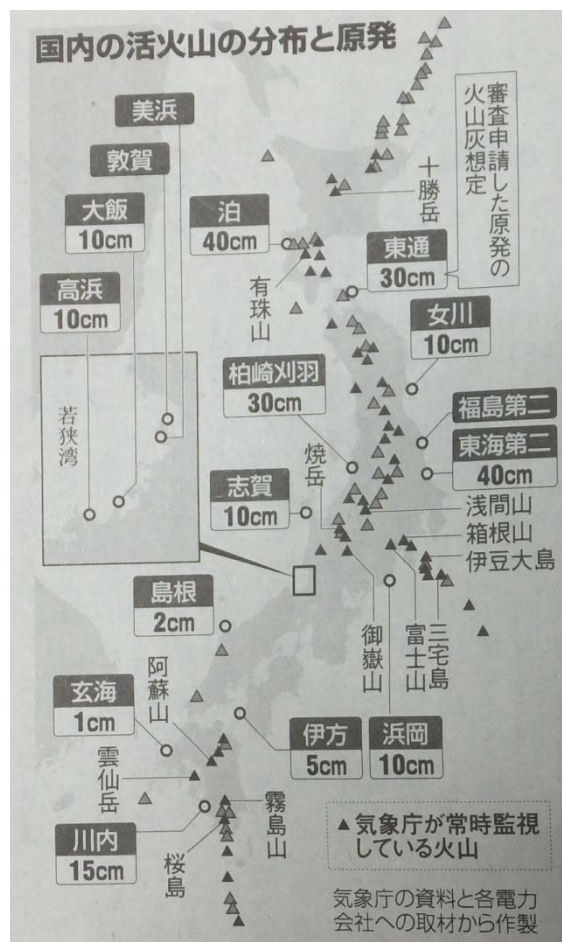
御嶽山噴火の翌日、中日新聞は噴火の生々しい写真と次の記事を掲載した。「再稼働に向けて手続きが進んでいる九州電力川内原発(鹿児島県薩摩川内市)の地元では、不安の声が上がった。川内原発の周辺には活火山が分布しているためだ。いきなり巨大噴火が起きた場合の対応が万全かどうかあらためて問われる可能性もある。川内原発周辺はかつて巨大噴火が起き、現在の原発敷地内まで火砕流が到達としたと考えられている。ただ、国の原子力規制委員会は今月、新規規制基準に適合していると認め、噴火の影響は小さいとした九電の評価も妥当とした。」

右の写真は朝日新聞10月5日の「原発、予知頼みの火山対策」に掲載されたものである。国内の活火山の分布と原発の地図を見ると、日本列島が「火山列島」であること、それとほぼ並行するように「原発地図」が北から南へと並んでいる。

「3・11」東日本大震災と原発事故のあと、巨大地震と大津波に目が向いてきた。日本は「地震列島」であるとともに、世界有数の「火山列島」である。「火山列島」が原発にどう影響するか、あまり注目してこなかった。

安倍首相は2日の参院本会議で「御嶽山よりもはるかに大きい規模の噴火を前提に厳格な審査を行っており、安全性は確保される」と、川内原発の火山対策について述べた。周辺には50キロ先の桜島、60キロあまり先の霧島山など活火山が多い。巨大なカルデラをつくり、付近まで火砕流が届くような巨大噴火も過去にはあった。

御嶽山噴火という、手のつけられない自然の脅威を前にして、もう一度「9・11」の現実をしっかりと見つめ直すことが必要ではないか。「火山噴火と原発」も、持続可能な日本社会を構築するうえで重要なテーマのひとつだ。



(2014年10月7日)